

# 日本道德教育学会神奈川支部 実践論文作成研究会(8月7日)

講師：東京家政大学教授 走井洋一先生

日本道德教育学会神奈川支部

## 実践論文作成研修会

アーカイブ映像

日本道德教育学会神奈川支部

### オンライン会員 実践論文作成研修会

講師：東京家政大学教授 **走井洋一** 先生

研修テーマ

～研究論文・実践研究論文の作法と  
まとめ方について～

日程	2021年8月7日(土)	無料
時間	15:00～16:10 <small>(15分～16分)</small>	
会場	Zoomによるオンラインミーティング <small>ミーティングID: 944 5399 4806    パスコード: 520847</small>	

**こんな方におススメ**

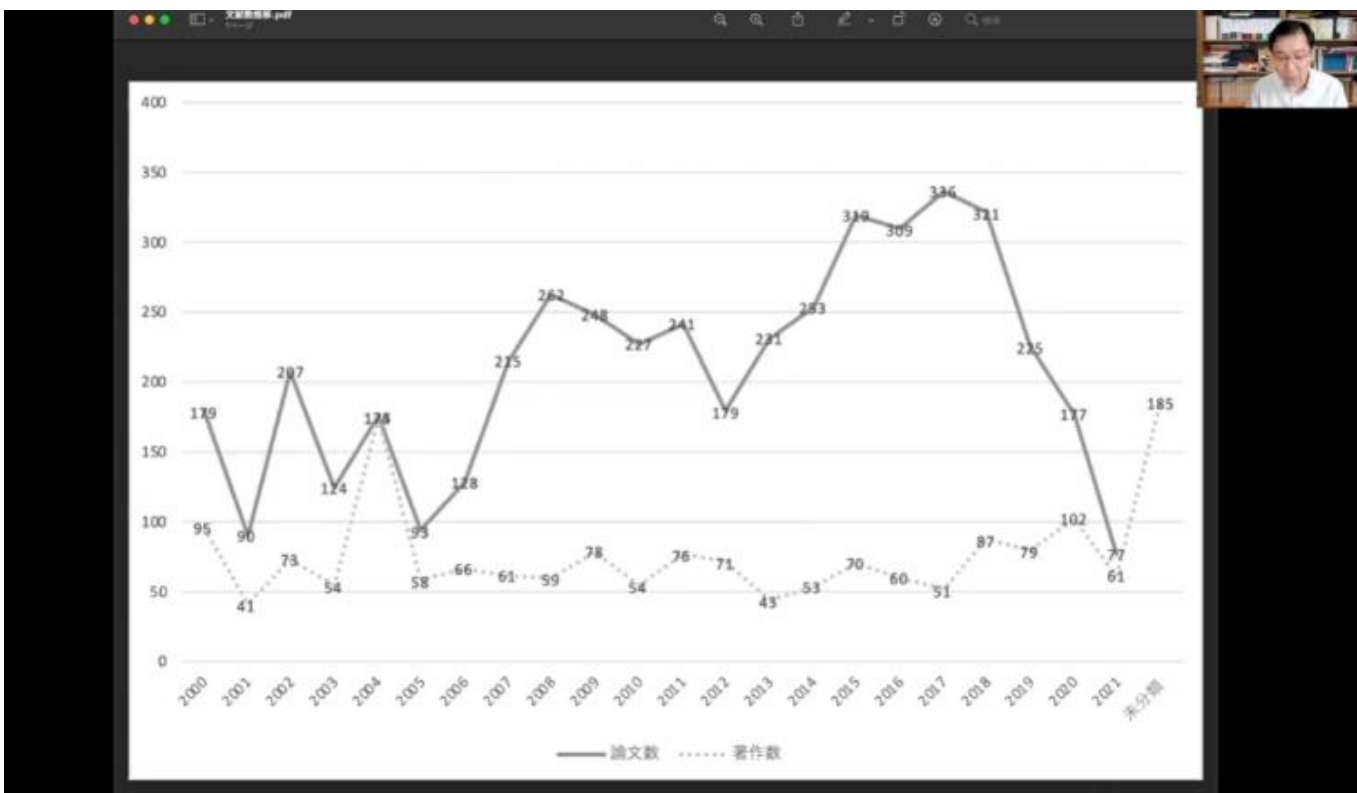
- ・論文執筆に興味があるが、どうやって書けばよいか分からない！
- ・研究成果の発表をしてみたい！

お問い合わせ  
日本道德教育学会神奈川支部事務局 (〒225-0000横浜市青葉区新石川3-22-1)  
神奈川大学入部部内 実践論文研究会 実践論文研究会  
事務局連絡先: jkrc@ncc.ac.jp

## 今回の研修会の趣旨

前回7月4日の論文セミナーでは、リサーチクエスチョン、先行研究の重要性についての解説だったので、今回は実践研究論文についての解説をする。

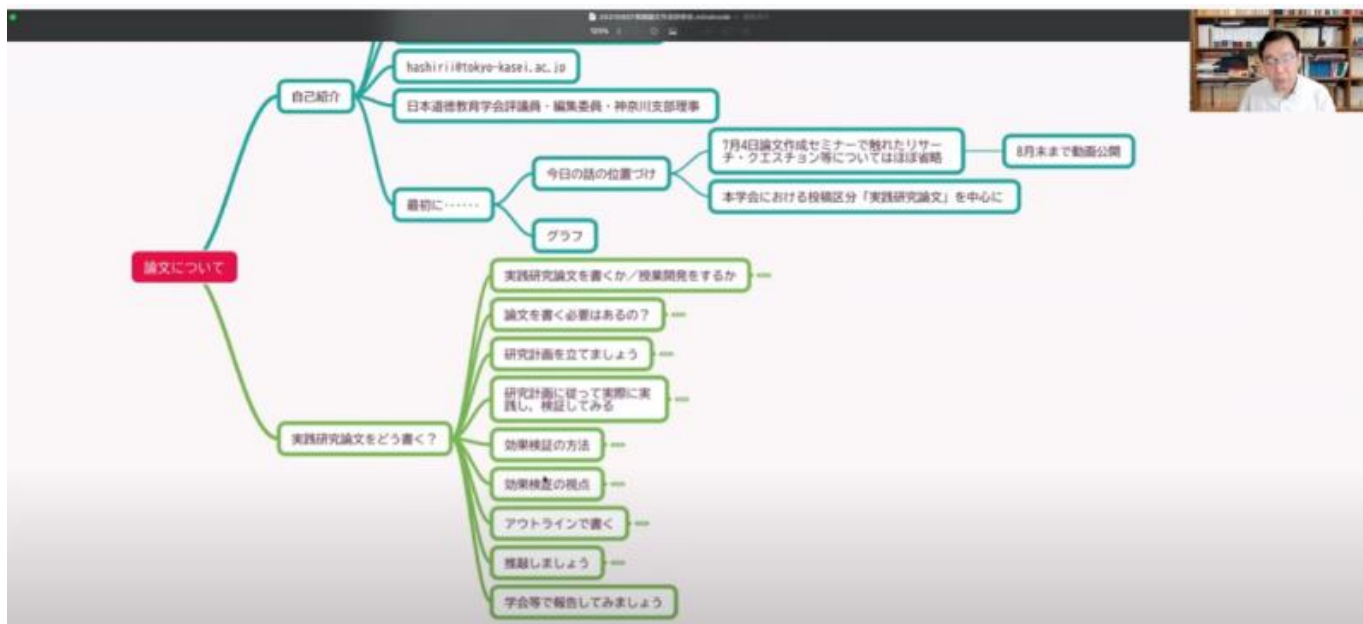
## 道德論文、著作の推移



- ・論文検索サイト CiNii より 2000 年以降、論文著作数はほぼ横ばいであることに對し、論文数は 2015 年の道徳科の実施以降減っている。
- ・2004 年の増加は地域教材の開発、副教材が多くなったためと考えられる。
- ・道徳に関する論文は今後減っていくのではないか。

研究の裾野が狭まってしまい、形骸化された道徳の時代に戻ってしまわないかということが危惧される。

※こちらについてはより詳細な分析を行った論文を、東京家政大学教職センター年報第 12 号に掲載予定です (2021 年秋に刊行予定)。



## 日々の授業を論文にする意味

- ・ヴィルヘルム・ディルタイの『精神的世界における歴史的世界の構成』(Der Aufbau der Geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften, GS VII 87, etw.) より、  
外に表現することを経由しないと、自分を知ることはできない。  
→実践も論文として記録として残し、振り返ることで妥当性や有効性を検証できると考える。
- ・道徳教育を下支えするような研究が減ってきていかなないように、論文という共有財産をつくっていく必要がある。
- ・効果についてもよい点だけを紹介して、改善すべき点は紹介されにくい。  
エビデンスをもとにした論文という形で授業実践を振り返るようにしてはどうか。
- ・教育は本来何かを目指して実施されるはずである。論文にすることで何を期待して授業をするかを明確にすることができる。
- ・授業計画では教育効果までは書かれていないが、論文はきちんと効果まで書かれている。

## 論文を書く上で必要な心構え

- ・論文では「よりよい実践」とはどのようなものか授業者自身がきちんと設定していないといけない。  
何をもって「よりよい実践」なのか。手ごたえか、授業者の肌感覚か、これが定まっていない状態で、論文を書くことはできない。
- ・道徳の授業の効果検証は難しい。しかし、それを着手せず曖昧にしてはいけない。
- ・エビデンスをもってよりよい実践化を検証し、次の授業に生かす必要があるのではないか。  
その結果、「自身の授業力の高めていく」+「道徳全体の底上げ」につながると考えられる。

- ・論文という形にすることで、世の中の人に問うことで、研究を高めていくことができる。
- ・子どもたちの健やかな成長を願うものである。社会にいる全ての子どもたちの成長を目的と捉えるならば、論文で発表する方が、教育として開かれた世界になっていくといえる。
- ・道徳の良し悪しを信念の対立にならないように、エビデンスに基づいた論文で議論していく必要がある。
- ・リサーチクエスションに基づいて進める。先行研究の探索も重要である。

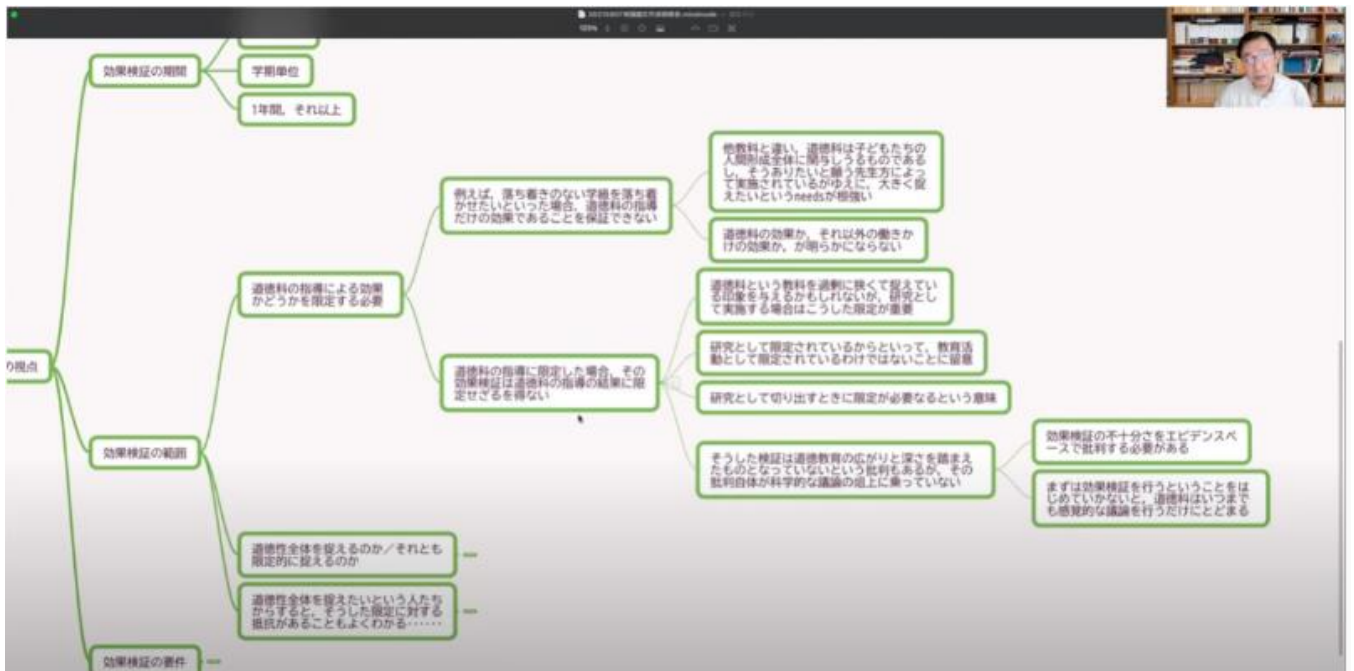


## 授業開発を研究にしていくために

- ・授業開発の場合は必要ないが、研究として進めていくために以下のようなことを意識する必要がある。
  - こういう方法でやっていく、こういう成果を期待しているということをあらかじめ想定しておく。
  - 授業前の検証もする。あわせて授業後の変容を考察する。これは必ずしも1時間の授業に限らない。
  - 期待される結果が出なくても論文に載せておく。
  - 効果が出ていないという結果を書いて、研究計画を練り直し、よりよいものをつくっていく。

## 先行研究で行われている検証法

- ・道徳性や道徳的な実践意欲や態度といった漠とした概念が対象であるため、効果検証が難しいといえる。先行研究では以下のような点で効果検証が行われている。
  - 発言数と内容の変容
  - 記述量と内容の変容
  - 他教科の効果検証を参考にすることなどがある。
- ・人間形成や、道徳教育全体の改善につながるものであってほしいという期待はよく理解できるが、それを検証することは困難。それゆえ、効果を検証できる「効果検証の期間」を明確にする必要がある。
- ・効果検証が、「道徳教育全体」あるいは「道徳科の授業」におけるものであるか「検証の範囲」を明確にする。例えば「こういう授業をやった結果、指導における落ち着きがないクラスに改善が見られた」という研究をする場合、その結果は、道徳の授業によるものなのか、その他の生活の中の指導によるものなのかが分からない。そのため研究とは特定の事柄で、特定の側面から得られる結果といった限定されたものにならない。
- ・道徳は幅広い人間形成ということで、今まで効果の検証などから遠ざかってきたが、研究として授業の一側面を切り出し、お互いに見合っていくことで道徳の研究の裾野も広がっていくのではないかと。



- ・ 道徳性、心情、判断、実践意欲、態度の定義などもエビデンススペースでとらえていく必要がある。
- ・ 道徳教育独自の研究のロジックではなく、様々な専門分野との協同研究も必要となってくる。
- ・ 効果検証の要件として、実施前と実施後の比較がある。例えば授業の最初と最後同じ発問をして比較するなどは良い取り組みであるといえる。

### 客観性を担保するために

- ・ やはり道徳は検証が難しい→どうやったら客観性がでるかを考える。
- ・ 科学性の担保、客観性とは→誰がやっても同じようにできる、子どもたちが違うから、結果は違うかもしれないが、「同じ手順が踏めること」が大切である。
- ・ 効果検証に扱うデータ→恣意的な抽出や解釈になっていないか注意が必要である。  
ある子どもの発言→なぜその発言を選んだか？他の子どもたちの発言は？全体の中での位置づけは？  
これらの理由から、このノート記述、この発言を取り上げたという理由が必要である。  
「よい」という基準が事前にきちんと設定されたうえで抽出されていないといけない。
- ・ 「こういう記述が生まれるのではないか」ということを予想して考察にしていく。  
リサーチクエスションに即して予め選ぶ基準が定まっていなるといえない。

### 道徳教育と統計の関係

- ・ 相関関係と因果関係を区別して考えないといけない。  
相関関係とは一つの変数（指標）の変化に応じて別の変数（指標）が変化することを表す。例えば「朝食を家族と食べると、成績がよくなる」という相関関係があるからといって、因果関係があるとはいえない（朝食を家族と食べれば成績がよくなるわけではない）。別の因果関係を明らかにするために、朝食を家族と食べることを調査している可能性を考えておく必要がある。
- ・ 相関関係から因果関係を導くことには慎重であるべき。

## 論文の構成について

- ・読む際に記述内容の重複や、順序の再構成しないように、書く時にアウトラインを整理して読みやすい状態にしていく必要がある。
- ・同じファイルの中でもアウトラインを組み合わせている。
- ・伝えたいテーマによって使う情報を取捨選択して、アウトライン構成する。
- ・ワードの「スタイル機能」で見出しをつくっていく。論文を書くのに Word は非常によく考えられているソフトである。
- ・研究計画、研究の実践の手順、研究の効果…のようにアウトラインを意識してまとめるとよいのではないか。
- ・間をおいて他人のつもりで読見直し修正していくことで、書き手だけでだけでなく読み手にもわかるような論文になっていくのではないか。

☆自身の実践を論文に残していくことは、道徳研究を下支えするものであり、子どもたちのよりよい生き方にもつながっていくという考え方にとても共感しました。走井先生、わかりやすくご解説いただきありがとうございました。